

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 久野 量一



学位申請者 MANIGOT Vincent

論 文 名 絵画における普遍性の探究——北脇昇と日本のシュルレアリスム

〈審査概要〉

本論文の公開審査は2018年7月19日17時から本学研究講義棟309教室で開催された。審査委員は本学から吉本秀之教授、山口裕之教授、久野量一准教授（主査）、また外部から、鈴木雅雄早稲田大学教授、松浦寿夫武蔵野美術大学教授（旧指導教員）の5名によって構成された。

公開審査では、まず最初に学位申請者のMANIGOT Vincent氏から本博士論文の概要がきわめて明晰な日本語で詳細に報告され、その後引き続き、各審査委員から講評と質疑応答が行われた。そして、審査委員会は全員一致で、本論文ならびに質疑応答を高く評価し、申請者に対して博士(学術)の学位を付与することが適切であるとの結論に達した。

〈論文概要〉

日本語で執筆された本論文は、日本のシュルレアリスムの代表的な画家の一人である北脇昇の包括的な研究であり、本論と北脇昇の全絵画作品の目録、つまり、この画家の最初のカatalog・レゾネの部分から構成されている。日本のシュルレアリスム美術をめぐる展示には必ず含まれ、この動向のもっとも重要な画家の一人とみなされながらも、これまで、研究書としては、1968年に刊行された中村義一氏の著書しか存在せず、また、大規模な回顧展も、1997年に東京国立近代美術館で開催された展覧会が一度存在するだけである。そして、この画家の生涯にわたる絵画作品の目録化は本論文以前には行われていない。また、本論文は北脇昇の全著作活動のリストを作成するばかりでなく、その未刊行状態にあるノートに至るまで、すべての著作を渉猟し、その成果を本論の記述のなかで十全に活用することに成功している。この意味で、本論文は、今後、北脇昇のみならず日本におけるシュルレアリスムに関する研究が依拠することを不可欠とするような、きわめて重要な学問的達成であること、また、書籍としての刊行が望まれることをまず何よりも強調しておきたい。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第 1 章 日本のシュルレアリスムと北脇昇の例

1.1 北脇昇、はじめに

1.2 日本のシュルレアリスム—固有かつ総合的な芸術運動の試み

第 2 章 現代的普遍性、科学的普遍性

2.1 科学と技術により見えない現実を見えるようにする

2.2 ゲーテの思想

2.3 芸術と科学の相互関係

第 3 章 全体的普遍性、宇宙的普遍性

3.1 見立てと擬人化

3.2 余白と空虚、時空間から意味をつくる

結論

付録 北脇昇：作品のリスト

参考文献

辞書的な項目の記載によれば、「北脇昇は日本のシュルレアリスムの代表的な画家である」といった一節に遭遇することになるが、そもそも日本のシュルレアリスムと呼ばれる芸術的な活動それ自体が何を示すのか、また、文学的な次元での活動として出発したシュルレアリスムが美術の次元でどのように成立しえるのか、といった一連の問いはいまなお開かれたままである。それゆえ、本論文は北脇昇の制作活動とそれが挿入される歴史的かつ理論的な文脈としての日本におけるシュルレアリスム運動の検討から始められることになる。著者は、日本における未来派という最初の前衛主義的な芸術運動や、それ以前の高村光太郎、徳富蘇峰に見られるような、西欧の芸術史に登場する様々な流派の交替現象に対する反応の形式を検討し、対立的な流派的な競合関係を止揚し、統合する場としての日本という思考の様態に注目する。そして、シュルレアリスムの受容に際しても、このような思考のモデルが十全に機能している様態を詳細に分析している。そして、北脇昇の場合、京都学派の哲学者たち、とりわけ、西田幾多郎、田辺元、高山岩男といった哲学者たちの思考を参照し、それに依拠することによって、諸文化類型の統合の場としてシュルレアリスムを構想するようになる点、それがさらに北脇を国粹主義的な思考に接近させる可能性を開いてしまった点がきわめて明晰に論じられている。

このような統合化の試みを、普遍性の探究として検討することが第 2 章および第 3 章の試みであるが、第 2 章では、北脇昇のもっとも注目すべき芸術的達成である一群の「図式絵画」とその形成を支える思考を、科学的な領域での成果への参照から実現していく様態をきわめて綿密に検討している。まず、北脇が同時代の中井正一による機械の美学を参照し、レンズを媒介とした光学機器である、カメラ、顕微鏡、望遠鏡による新しい視覚的な

事実に注目すると同時に、ゲーテの『植物のメタモルフォーゼ』で展開される形態論的な視点への強い関心を示す点が検討される。そのうえで、すべての差異を生成させる原型としての「原植物」を構想するゲーテの思考と、『易経』に見られる「行の構造」とを統合する北脇昇の試みに、いわば、「原現象」的な次元、つまり、すべての現象を生成させる次元を想定することによる、統合化ないし普遍性の探究を著者は明晰に分析することに成功している。

第3章では、この統合化の様態が主として二つの点から検討されている。ひとつは、サルバドール・ダリがその作品において駆使する「擬人化された風景」という手法と日本における「見立ての手法」との統合による新たな普遍性の探究の様態と要約できる。そして、この見立てという手法の延長線上に、同じく京都大学の美学者である植田寿蔵の「ある庭石の視覚構造」を参照する過程で、北脇は余白的な領域、つまり、空虚、無の領域への関心を深めていくことになる。そこで、著者は北脇によって書かれた「世阿弥の機能主義的理解」と題されたきわめて難解な文章を精緻に読解すると同時に、東洋的な美学の虚実論、京都学派の哲学者たちによる無の概念を検討し、北脇の絵画作品において徐々に増大していく余白の領域のもたらす意味を記述することに著者は成功している。また、余白が増大するにつれて、画面には意味的な隣接関係を欠いた要素が分散化される傾向が強まっていくが、この点を中井正一によるモンタージュ理論の検討を参照し、コブラ、繫辞の不在という事態として分析する点は単に明晰であるばかりでなく、今後展開しうる理論的な可能性を備えている。

なお、付録として含まれる作品リストは、275点におよぶ絵画作品のすべてを追跡し、集成した貴重な成果であり、このカタログ・レゾネによって、初めて、この画家の画業をその全体性において概観することを可能にした点で、きわめて重要な基盤的な学術的貢献となっている。このカタログ作成に費やされたであろう膨大な努力に対して、率直に敬意を表したいと思う。

〈審査の経緯と審査結果〉

最終試験では、各審査委員からきわめて高い評価と同時にいくつかの問題点が指摘された。提示された問題点は主として以下の2点である。ひとつは、本論文の題名に含まれていると同時に本論の記述においても重要な意味を持つ普遍性という概念についての曖昧さについてである。東洋／西洋、見えるもの／見えないもの、といった一群の対立項が構成する関係の超克という点に普遍性という概念を設定しようとした点は、この質疑応答で明瞭に示された。また、本論文では扱われなかった点だが、可能性として示唆されている集団制作による普遍性の実現という記述の意味についての更なる説明が求められたが、著者はきわめて明瞭にその詳細を説明しえたことも指摘しておきたい。また、単に「擬人化された風景」と「見立ての手法」が統合されたというよりも、シュルレアリスムの習得によ

って初めて「見立ての手法」を発見できたのではないか、フランスの美術を通して初めて伝統的な日本の美学を発見するという展開がありえたのかといった問いとともに、単なる加算的な折衷主義とは異なったモデルの検討も質疑応答において行われた。

二点めは、見えないものを見ることを可能にした科学的な新しい器機による世界像と、アンドレ・ブルトンが高く評価したエルンスト・ヘッケルの形態論的思考に関して、さらに質疑応答が行われた。この点に関しても著者はさらに探究すべき諸問題の所在に関してきわめて誠実な応答を行った。

最後に、本論文の日本語による記述に際して、ときに曖昧な表現、文意の正確な把握に困難を覚える箇所がいくつかあることが指摘されたが、大学入学後に日本語学習を開始したにもかかわらず、明晰な日本語で博士論文を執筆した著者の努力と成果は特筆に値するものと審査委員会は判断した。

このような問題点の指摘と質問に対して、マニゴ氏はきわめて明晰に返答し、改めて著者が自らの研究対象ならびにこの対象が挿入される文脈に関して、該博な知識を有し、またきわめて明晰な思考を展開しうることが明らかになった。また、これらの指摘に対してマニゴ氏はきわめて誠実に受け答えし、今後の研究に反映させる意図を率直に表明した。

以上のように、いくつかの不備は指摘できるとしても、マニゴ氏の本論文は、北脇昇のみならず、日本におけるシュルレアリスムに関して、今後の研究史的な観点で参照不可欠な包括的な研究であり、そのきわめて高い学術的価値は疑いようもなく、今回の審査での指摘を参考にして、直ちに書籍として刊行されることが望まれる。また、本博士論文は北脇昇論として卓越しているばかりでなく、日本の近代芸術の理論的かつ歴史的な次元の諸問題の検討へとつながる興味深い考察を多く含んでいる点でも、今後、著者がさらに自らの研究を深化させていくことを十分に期待することができる。

以上の点で、審査委員会は論文審査および最終試験の結果から、全員一致で、本論文がきわめて高度な学術的貢献であると判断し、マニゴ・ヴァンサン氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。